

夏への

トシネ

の  
出口

さよなら



迷  
くつか

アニメイト限定  
書き下ろし  
SSペーパー

## 思い出はプールの底に

川崎さんはクラスの女王様で、唯一「さん」付けして呼ぶ同年の女子だ。

彼女の顔のよさと何者無人な振る舞いに敬意と恐怖の念を込めて「さん」付けしているというわけではなく。実はちゃんとした理由がある。

あれは中学二年の夏のことだった。

その日はプール授業だった。僕は夏風邪で、川崎さんは体調不良で見学していた。僕たちはプールサイドのベンチに座って、授業に励むクラスメイトを眺めていた。二人の間に会話は一切なかった。無理もない、見学とはいえ授業中なので楽しくお喋りというわけにはいかなかったし、互いに「クラスメイトである」という以外に共通点がなかったのだ。だから僕は、教室からプールサイドに持ち込んだ下敷きで顔を回しながら、授業が終わるのを静かに待っていた。

一方で川崎さんは、妙に落ち着きがなかった。

体調不良だとはきいていたけどあ、時おりお腹を捻るくらいで、あまり具合が悪そうには見えなかった。彼女は荷立たしげに貧乏ゆすりをしていて、どちらかというと不機嫌そうに見えた。トイレでも我慢しているのかな、と当時の僕は考えたものだ。

やがて授業は終了した。クラスメイトは

次々と更衣室へと向かう。先生は僕たちに「教室に戻つとけ」とだけ言つてその場を離れた。

僕はベンチから立ち上がり、教室に戻ろうとした。だけど川崎さんは座ったままだった。不思議に思いつつも、彼女のことは放つて置いて僕は教室に向かった。

下敷きをプールサイドに置き忘れていることに気がついたのは、教室に着く直前のことだった。

別になくても困るものではないけど、置きっぱなしにしておくわけにもいかないの濡らしたクラスメイトたちとすれ違った。すでにほとんどのクラスメイトが着替えを終えて教室に向かっていようだった。

僕は足早にプールサイドに入り、そこで川崎さんの姿を見つけた。

川崎さんはプールの隣に腰掛け、スカートをまくつて素足を水の中に浸していた。何やら楽しそうに。ちやぷちやぶと脚をパタつかせている。

僕はかなり驚いた。一体何をやっているんだろう。と、だけどなんと声をかける気にもなれず。黙って見ていたら、川崎さんとも目が合った。

川崎さんは驚いたように立ち上がり。ただその直後脚を踏み外してプールに落とした。ドボン。と飛沫が舞い。川崎さんはブクブクと沈む。僕は呆氣にとられていた、辛い。

川崎さんは溺れることなく自分でプールサイドに這い上がってきた、当然びしょ濡れだった。

僕はハツと我に返り、さすがに声をかけたほうがいいと思つて、言つた。

「え、えっと……大丈夫？ 川崎」

「……気安く呼ばないで」

「あ、はい……か、川崎さん……」

「このこと、喋ったら殺すから」

キツ、と僕を睨み、川崎さんはプールサイドから出て行く、川崎さんの顔は真っ赤だった。

その後、彼女は授業に出ることなく、早退した。

事の顛末はそんな感じだ

今となつては記憶が曖昧なところもあるけど、「気安く呼んではいけないこと」と、「プールに落ちたことは誰にも喋ってはいけない」の二つの言いつけは、楔を打ち込まれたかのようにはっきりと覚えていいる。

そして、僕が高校二年生になって少し大人に近づいた今だからこそ、分かることがある。

あの日、川崎さんはプールに入りたくて仕方がなくなつてから端だけでもプール浸かったのだろう。

……いや、本当のところは分からない。僕に真偽をたしかめる術などないのだ。なぜなら、あの日のことを喋った、僕は川崎さんに殺されてしまうのだから。